

第5章 卒業期

1 はじめに

卒業を前にして、この時期の学生は卒業後の進路選択に迫られます。進学か就職か？自分は何がやりたいのか？もし就職するなら、自分はどんな職業が向いているのか？ということについて悩み、自分なりの答えを見つけ出していかなければなりません。それはまさに、自分自身と向き合い、これまで自分がどのように生きてきたかを見つめ直し、今後どのように生きていくかについて考えていくという「アイデンティティ確立」の過程です。その過程で、自分自身の適性や本当にやりたいことについてわからなくなり、一時的に精神状態が不安定になることがあります。また、就職活動を巡り、親子関係の葛藤など、これまで潜在していた問題が表面化してくることがあります。

2 卒業期における相談と対応

2-1 事例：本当にやりたいことを見つけ出していった男子学生

4年生のEくんは、理系の男子学生です。将来研究者になりたいと思い大学に進学し、大学院に進むつもりで今まで大学生活を送ってきました。これまでの学業成績は良好で、すでに、大学院試験にも合格し、来春は大学院への進学が決まっています。しかし、いざ卒業研究に取り組んでみると、実験はあまり得意ではなく、思ったような成果はなかなか出ません。また、次々に研究成果を求められるような競争的な雰囲気もなんと

く自分には合わないと感じてきました。「このまま大学院に進んでいいのだろうか?」,「自分は本当に研究者に向いているのだろうか?」と悩み始めたEくんは, すっかり元気をなくしてしまい, 学生相談機関を訪れました。

カウンセラーと話す中で, Eくんは, 大学入学前に自分が思い描いていた研究と実際に体験してみた研究活動との間に大きなズレがあることに気づき, 研究者になるという夢は本当にやりたいことではないように感じ始めました。一方, 大学入学以来活動しているボランティアサークルでの活動が自分にとってはとても意味のあることのように感じていると語りました。このボランティアサークルは, 地域の活性化のために, 地域の人と一緒になって様々なイベントを催す活動を行っていました。競争的な雰囲気の中で成果を上げていくということよりも, いろいろな人と協力して何かを作り上げていくことの方が自分は向いているし, やりがいを感じると語ったEくんは, 卒業研究だけは何とか仕上げ, いったん大学院に進学しましたが, その後休学し, イベント事業を手がける会社への就職活動を始めました。目標が決まったEくんは少しずつ元気をとり戻し, 現在就職活動に頑張っており取り組んでいます。

(1) 学生の理解

① つまずきは, 自分と向き合う貴重な体験

これまでの学業成績が良好な学生でも, 卒業研究や就職活動に取り組むはじめると, 「自分が思っていたようには上手くはいかない」というつまずきを体験することがあります。これは, 学業成績が, 実際の研究や社会での就労において求められる能力と必ずしも直結するとは限らないからです。一方, これまで

何とかギリギリやっていた学生の場合は、卒業研究に取り組むと同時に難しさが決定的なものになってしまうという場合もあります。このようなことから、多くの学生にとって、卒業期は何らかのつまずきを体験する時期であると言えます。そして、これまでの人生において、つまずきの少なかった学生ほど、その衝撃は大きく、事例のEくんのように、時にはひどく落ち込んでしまい、場合によっては、大学から足が遠のいてしまうこともあります。しかしながら、この時期のつまずきは自分と向き合う貴重な体験という積極的な意味も持っており、むしろ、このようなつまずきに対して自分なりの折り合いをつけていくということなしに、「アイデンティティの確立」は進まないと言えます。

②自分の興味と適性をよく吟味し、自己決定する

研究や就職活動などは、実際に体験してみないと、その難しさはなかなかわかりません。また、研究者や職業人としての姿勢、現場の雰囲気なども体験してはじめてわかることが多いものです。卒業期の学生は、研究や就職活動を実際に体験してみて、その体験をよく吟味し、自分自身の適性について考え直すことが重要です。考え直した結果、はじめは上手くいかなくても、努力して少しずつでも能力を高めていこうと決心することもありますし、場合によっては、これまでの夢や考えていた進路を変更せざるを得ないこともあります。いずれの選択をするにせよ、重要なことは、じっくり考え、学生自身が自分の責任で進路を決定していくということです。

(2) 教員の対応のポイント

①学生の自己決定を尊重する

この時期の学生への対応として重要なのは、学生の自己決定を尊重するということです。そのためには、ある程度の時間が必要なこともあり、休学など一見遠回りしているように見えることもじっくり悩むための時間として大きな意味を持つことがあります。また、進路変更や中退なども、学生自身がじっくり考えた結果であれば、尊重してあげることが大切です。ただし、研究がうまくいかないということから逃げたいがために、学生が、安易に進路変更や、中退を申し出る場合には、早急に決めないで、まずは、両親やいろいろな人の意見を聞きながら、じっくり考えてみることをすすめるほうが良いことがあります。

②待つことの重要さ

学生が悩んでいる間は、様々な活動のペースが停滞しがちです。しかし、このような場合には、あまりせかさず、周囲はじっくり待つ姿勢が重要になります。十分悩むことを保証しつつ、いつ頃までには暫定的にでも答えを出すという、期間を設定してあげることも、同時に大切です。期間が決まっていると、待つほうも学生に無用のプレッシャーを与えることなく、落ち着いて待つことができます。

2-2 事例：進路選択を巡り親からの精神的自立を果たした女子学生

進路の悩みで学生相談機関に来談した文系女子学生のFさんは、出版関係の会社を志望しています。小さいころから本が大好きだったFさんは、将来本や出版に関わる仕事がしたいと心に決めていました。しかし、Fさんの両親は、公務員の受験を

強くすすめていました。「このご時世だから、安定した職に就く方が安心」というのが両親の言い分です。Fさんは、「確かに親の言うことには一理あるし、公務員になれば親も安心してくれるかもしれない」と出版社への就職を辞めようかと悩み始めましたが、このままあきらめることに納得できない気持ちもありました。

カウンセラーと話す中で、Fさんは親との関係について語り始めました。「いつも心配してくれることはありがたいけど、あれこれ指示してされるのは、いつまでも子ども扱いされているみたいで嫌。『私がどうしたいかということよりも、本当は、自分たちが安心したいという気持ちが最優先なんでしょう』と反発したい気持ち」。そして、自分自身もこれまで親の顔色をうかがい、希望に沿った生き方をしてきたこと、自分の意見を強く主張した経験がないことに気づきました。そこでFさんは親に出版の仕事の魅力や自分の思いを伝えてみました。両親は、すぐには納得してくれませんでした。Fさんは「これは自分自身のことだから、悔いのないようにしたい」と、出版社の試験を受けることにしました。なかなか内定はもらえませんが、Fさんは出版社への就職活動をあきらめずに挑戦し続けています。Fさんの真剣な態度に両親も最近は見守るようになってきています。

(1) 学生の理解

①親の価値観からの分離

進路を決めるということは、親から精神的に自立し、一人の成人として生きていく方向性を定める意味があります。そのためには、親の意見や価値観は、絶対のものではなく、さまざま

な価値観や意見の一つであるとして相対化してとらえることが重要です。そして、そのうえで、自分なりの価値観を築き上げていくことが求められます。この時、Fさんのように、親の意見に逆らわずに来た学生ほど、親の意向に沿わない行動をとることに罪悪感を抱きやすく、精神的には大変負荷の大きい作業となります。そのような学生が、葛藤を乗り越えられるためには、葛藤することそのものを肯定し、見守る姿勢で接してくれる周囲の人の存在が大切になってきます。

②自分なりの納得の仕方

上手くいったかどうかという結果よりも、自分なりの価値観に基づき、チャレンジしてみたかどうかというプロセスが大切になります。Fさんは今後、もしかすると出版社への就職が決まらず、親の言うように公務員試験の受験に方向転換するかもしれません。しかし、そのような場合でも、自分が納得いくまでチャレンジした結果かどうかという点が重要になります。自分なりの納得がつけられない場合は、そこから前に進むことは難しく感じられます。一方、うまくいかない場合でも、納得するまでやってみたという実感がもてると、精神的に一区切りつけることができ、たとえ進路変更したとしても、新しいことに気持ちを切り替えることが比較的スムーズにできます。まずは事例のように本人なりの納得の仕方を支持することが大切であると思われます。

(2) 教員の対応のポイント

①見守る存在の重要さ

親からの自立を目指す動きは、同時に、自分一人で大丈夫だ

ろうかという不安を喚起させるものです。まずは、そのような学生の不安を理解したうえで、親に対して反発心を持ってしまうことや、葛藤し悩むことそのものを肯定し、見守り続けることが大切です。また、学生から相談を受けた時には、「自分はどうしたいのか」という原点にかえるように、繰り返し問いかけてあげることが重要です。そして、親の人生ではなく、自分の人生を生きるという視点で何が大切かということと一緒に考えていくことが、悩む学生の自立を支えることにつながります。

②自主性を尊重する

親からの自立の過程では、学生の中に成人としての要素と未だ子どもとしての未熟な部分が相まって存在するよう感じられることがあります。親にとってはいつまでも子どもと感じられる部分かもしれませんが、周囲の大人は、学生に対して一人の成人とみなして接し、学生の自主性を尊重して行く態度が重要です。